



ポストコロナに向けた新しい研究室様式への展開 ～研究室ルーチンワークに対する時間的・心理的負担の把握～

共同獣医学部 獣医解剖学教室 今井啓之

背景と目的

遠隔講義システムの導入の一方、研究室の諸活動の多くは改善が不十分

- ・ 機器メンテナンスなど

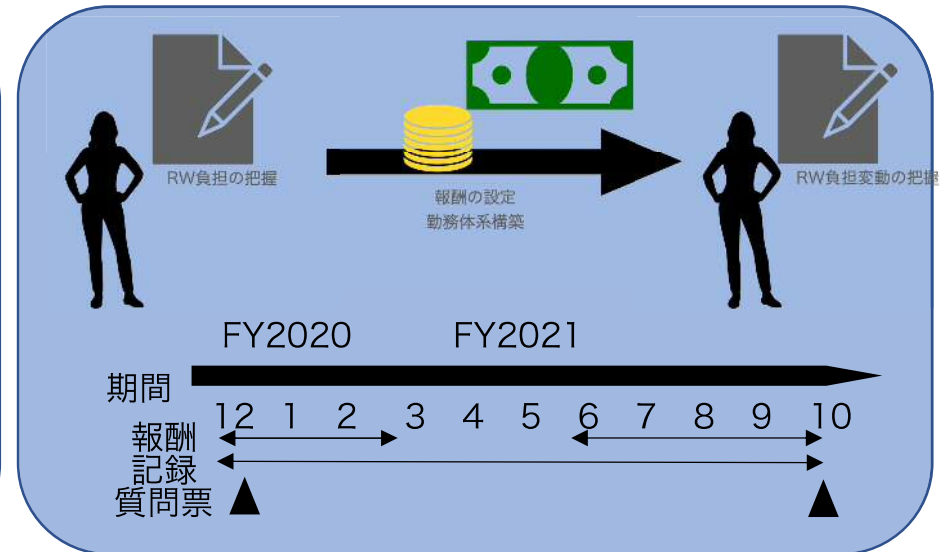
研究室ルーチンワーク

- ・ 「持続的な研究活動を行うための研究室活動に関する教育」と定義

- ・ 研究の核となる飼育動物の世話に着目

ポストコロナ社会における研究室運営像を模索

方法



結果

- ・ 対策は十分に継続
- ・ 研究室活動は正常化しつつある
- ・ サークル等は依然活動減少
- ・ 複数人で過ごす時間の減少
- ・ 「責任感」「積極性」を伴い体系化
- ・ 報酬設定なしではモチベーションの減少

考察

Postコロナ=複数人で過ごす時間減？

- ・ 学生の柔軟な対応能力とその活用
- ・ 報酬設定と体系化により効率的な研究室活動の継続が可能
- ・ 学生主導の活動への適切な支援・助言



山口大学研究プロジェクト
コロナの時間学 ～新型コロナウイルスが人間と社会に対して与える時間的影響～

研究成果報告書

主研究者	今井 啓之	所属	共同獣医学部・獣医学科
共同研究者	加納聖、日下部健		
研究課題名			
ポストコロナに向けた新しい研究室活動様式への展開～研究ルーチンワークに対する時間的・心理的負担の把握～			
研究内容と成果の概要			
COVID-19 の拡大に伴い、密になりやすい研究室における諸活動は縮小されている。活動の縮小にあたり、連絡体制整備や Web ミーティングシステム導入により効率化が実現した一方で、使用機器類のメンテナンスや飼育動物の世話などといったマンパワーを要する研究ルーチンワークの多くは改善方策が実装できていなかった。特に自宅でのオンライン授業の受講と大学での対面実習とを両立しつつ研究ルーチンワークへの時間的及び心理的負担は大きいと予想され、また研究室の活動の縮小により研究ルーチンワークへのモチベーションの維持に十分な動機も失われやすいと予想された。本研究では、研究ルーチンワークを「持続的な研究活動を行うための研究室活動に関する教育」と定義し、With コロナ社会での学生の研究ルーチンワークに対する実情を把握し、そのあり方を再考することで、Post（または With）コロナ社会における研究室運営像を模索した。 本研究における対象とする研究ルーチンワークを特に動物の観察及び世話に設定し、これに携わる学生の時間的・心理的負担及び研究に対するモチベーションを質問票と作業記録簿を用いて把握した。次に、時間的・心理的負担の軽減と作業に対するモチベーション向上を目的に研究ルーチンワークへの報酬を設置し、上記手法により負担・モチベーションの変動の把握を試みた（機関内承認済み実験）。中間評価においては、概ね研究ルーチンワークのモチベーションの向上が見られたものの一部課題も明らかとなった。また、心理的・時間的負担は当初予想したものよりも小さいことが明らかとなった。これらは柔軟な適応能力と授業における移動時間等をはじめとする各種配慮等が奏功したのかもしれない。本シンポジウムでは、本取り組みの最終的な学生への影響を総括し、Post（または With）コロナ社会における研究室像への提案を行う。			

研究進捗状況・研究成果の公表状況等

論文、学会等発表、実データの利用状況、研究の有用性を広めるための活動など

本研究は人へのアンケート調査を含むため、研究の開始に先立って研究内容について機関内の承認を受けた上で実施した。

現在、最終的な調査を実施中であり、結果を総括し、本シンポジウムにて公表を予定する。論文・学発表等は現在までに行っていない。